

文學博士 谷本富先生著 豫告 第二輯 教育史の研究 第四輯 教育學概論  
第三輯 宗教教育論 (以上逐次刊行)

大學講義 第一輯 義全集

# 道德新論

菊判布製 四七六頁 價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢

附錄 歐洲最近思潮一斑

- ▼谷本博士が大 學退職の記念
- ▼博士が多年歐 米留學の産物
- ▼我國著述界破 天荒の新學

少數の學徒の外鏡ふ能はざる帝國大學講義の内容今や本書に依りて吾人居ながら之を知るを得るは豈學界の一大慶事にあらずや況んや平明流暢の文眼のあたり博士の講演を聴くの感あるに於てをや況んや其内容普通の道德論と異り吾人に直接緊要なる幾多の重要事項を以て充實せるに於てをや

大日本圖書株式會社 東京銀座二番九番

## 歐洲出兵論を葬る

一 賣名弄兵の亡國論

某海軍將官

余は歐洲出兵には絶對に反對である。余の觀る所を以てすれば若し我國にして此際歐洲出兵の如き無謀を敢てすれば忽ちにして國家破滅であると思ふ。元來歐洲出兵など云ふ暴論は多少の思慮あるもの、眞面目に口にだすべき問題ではないのである。何故なれば、假りに我國が二三十萬の精兵を歐洲に送り得るとする、而して見事に獨逸を敲き付けて聯合軍側は之に由て完全なる戰勝を贏ち得たとする。此時に彼等聯合軍は果して我邦人が期待するが如く十分なる謝恩的報償を我國に與ふるであらうか。我國が既に歐洲に出兵する以上は、之が爲めに蒙る所の兵力の缺損並に財政經濟上の打撃は、過ぐる三十七八年戰役以上であると覺悟をせなければならぬ。

從つて少くも之を補償し得る底の大利權を我掌裡に收むるに非ざれば我國は國力疲弊の極、自から衰へるの外はない。而かも聯合軍側の諸國は果して何物を以て我國に酬んとする乎。吾人の見る所を以てすれば彼等各自獨逸に對して開戦の理由を異にするのみならず、其獨逸に打勝ちし場合の利害關係は相一致せず、就中英露兩國の如きは全く相反するのであるから、戦後の外交期に於ける相互の暗闘は非常なものであると思はなければならぬ。斯かる際何者の迂愚者か自己の利害を第二にして他の爲めの利權の獲取に努力するものあるべきや。之を我國力より推し、又歐洲派兵後の形勢を揣摩し、且我外交家の手腕を參酌する時は、我國が戦後の外交場裡に於て、英、佛、露等の諸國を威壓し、少くも彼等と對等の地歩を占めて、報償上の利權を十分に獲取するが如

きは思ひも寄らぬことである。されば假りに我國が歐洲に出兵して非常の好成績を挙げ得たりとするも、其爲めに得る所は我國威の發揚乃至我國軍の勇武を謳はるゝと云ふ一種の虚名のみで、他に何物もないのである——假令之ありとするも大局より觀て打算に入るゝに足らぬ、然るに之に反して其失ふ所は如何と言ふに、兵力の大缺損である。國力の大疲弊である。財政上の大負擔に伴ふ國勢の陵夷である。切言すれば國家の破滅である、少くも一二等國たる地步を失墜して三四等國への墮落である。或は又幸に我國にして此戰勝の結果非常なる大利權——我兵力、國力の大缺損を十分に償ふに足る底の大利權を獲取し得たりと假定せんか、それこそは大變である。何故なれば此時に於ては世界の危險物は最早獨逸に非ずして我國となるからである。獨逸の軍國主義を打破したるものは獨逸以上の軍國主義者でなければならぬ。従つて從來の獨逸が世界の危險物であつたとすれば、戰後の我國は獨逸以上の世界の危險物であらねばならぬ。況んや人種上の關係もある。故に戰後の歐洲に於て猛烈なる黃禍論の再燃すること期して待つべく、而かも其火種は白人諸國が聯合して我國を包圍攻撃し、我國を焼き盡さずば已まぬであらう。少くも我國をして彼等白人の從屬國たるに至らしめずんば已まぬであらう。假令大地を打つ槌は外るゝとも吾輩の此觀測は

誤まらぬと確信する。  
 以上は假りに我國が派兵して勝つた場合の話であるが、之と反對に若し我軍が負けた場合はどうかと云ふに、これは改めて言ふまでもなく、散々である。兵力の缺損と國力の疲弊との戰勝の際に比して遙かに大なるは素より、之によつて受ける精神的の打撃も亦實に非常のものであると言はなければならぬ。併し乍ら觀方によつては寧ろ此方がまだ幾分増しかも知れぬ。何故なれば戰後に於て歐洲列國の嫉視を受けて八方塞りとなる虞れが少ないからである。とは言へ、此時は我國は辛うじて極東の一獨立國たり得るに過ぎぬことを覺悟せなければならぬ。無勝負の際も略ぼ同様である、たゞ負けた時よりも幾分兵力の缺陥が少ない位のものであらう。而して負けた時、無勝負の時、共に歐洲出兵は無意義となるのである。

二

即ち之を勝、無勝負、負執れの場合より觀察するも歐洲出兵は我國の爲めには有害無益である。  
 以上は假りに歐洲に出兵し得るものと假定して議論を立てて見たのであるが、更に之を實際問題として考ふる時は、到底之を派遣し得ないことが分かる、今假りに之を我出兵要求

説の比較的盛なる佛國方面に送るものとして打算せんに、我國より佛國に二三十萬の兵を輸送するには無慮數百隻の巨船を要する。假りに兵員一人毎の輸送に要する船舶の容積を約六噸とすれば二十萬を輸送するためには無慮百二十萬噸三十萬の兵を輸送するためには無慮百八十萬噸を要する。而かもこれが悉く航洋船舶——少くも三四千噸以上の大船巨船——でなければならぬ。知らず我國は何處より如何にして此船舶を得來るべきぞ、夫の海上王たる英國ですら南阿に二十萬の兵を輸送する爲めにはあの大騒ぎをやつたではないか。更に之を我日清、日露兩戰時の實際に徴するも、我國が海路一時に輸送し得る力は、四五萬の兵員に過ぎざることが證明せられる。然らば我國が二三十萬の兵を歐洲に出し得るまでに四五萬宛分割して送るの外無きが故に、一ケ年乃至一ケ年半の日子を要することを覺悟せなければならぬ。二三十萬の兵を一時に輸送し得てこそ多少の効果はあれ、之を數回に分割して送つたのでは何の用をも爲さぬのである。故に此一事既に歐洲出兵の不可能と無効とを證明して餘りある。若し之に加ふるに、更に續送を要する補充兵——是亦少くも二三十萬を要すべし——の關係、糧食及彈藥供給の關係、我諸航路撤退に因つて蒙むる貿易上の大打撃等を以てする時は、人間にして萬能の神に化せざる限り、斯かる企劃を實行し得

歐洲出兵論を弄る (某海軍將官)

べからざることは火を賭るよりも明らかである。  
 然らば之を西比利亞鐵道により露西亞側より送らば如何と云ふに、聞く所によれば、露軍が波蘭並にガリシヤ方面に作戦せる關係上、機關車の多くが其方面に吸収せられて居るため、目下西比利亞鐵道の機關車は大缺乏を感じて居るとの事であるから、此方面から輸送することも恐らく至難であらう。併し乍ら、假りに機關車が極めて豊富であると假定しても、數ヶ月の後にはモスコフ附近までは到り得るであらうが、それより愈々戰地に入り込まんとすれば、特に我掌裡に收める兵站線路——十分の兵站線路——がなければ到底不可能である。而して自己の兵站線路にすら缺乏せる露軍が特に我軍のために十分なる兵站線路を制與するが如きは、我軍にして露帝陛下の統率、命令權の下に従屬すれば兎に角、左もなき限り夢にだに實行の出來ることではない。従つて辛うじて之を送り得ると云ふに止まり戦ひ得ぬのである。無論問題にならない。或は途を加奈陀にとるべしとの説あらんも、這も亦略ぼ海路佛國に送ると同様の困難がある。たゞ大西洋上を英佛の船舶に依頼し得べきも、我國より海路加奈陀に至り、加奈陀に上陸後更に鐵路によつて其東岸に向ひ、其東岸に下車して後更に乗船するの大混雑と、兵站上の設備關係等を參酌する時は矢張り二三十萬に上るの大兵を短時日に輸送するこ

とは不可能である。要するに歐洲出兵は兵員輸送の關係に於て空論と云ふことに歸著する。

### 三

次には、假りに之を送り得るとするも、其名義がない。我國軍建制の意義は専ら自國を防衛すべきものであつて、苟くも防守自衛の範圍外には其兵力を使用し得ないものである。尤も同盟條約の結果、或條件の下に、或程度まで此目的の範圍外に兵力を使用することもあるが、それは已むことを得ざる變則で、斷じて我國軍建制の本義ではない。果して然らば今や一部の人士間に問題となりつゝある歐洲出兵の如きは如何にしても之を唱道すべき名義がないのである。即ち我國は國家の防衛上、獨逸の本國に強大の陸軍があらうと無からうと、何等の痛痒を感ぜない。我國防上恐るゝ所は寧ろ其海軍である。故に獨逸の海軍の殘存と云ふことは少くも戦後に於ける我國防計畫上、最も慎重に考慮すべきであるが、併しこれとても既に英國の方が我國よりも一層危険を感じつゝあるので、飽までも之を撃破せざれば戦局を結ばずとの決心を持つて居るから、恐らく我國を威嚇し得る程の勢力は戦後に殘存せぬかと思はれる。兎も角も我國が國防關係上、獨逸の兵力を殺ぐの必要あるは陸軍ではなくして海軍である。而

ざる限り、如何なる場合と雖ども此主力艦隊の保存に勉めなければならぬ。既に然り、英國救援の我艦隊編成の場合と雖ども斷じて主力を派遣し得べきに非ず、而して我艦隊より主力を除きたる如き微弱の艦隊は英國救援の用を爲さぬのである。

斯の如く同盟國たる英國の危急存亡に瀕せる際と雖ども艦隊を派遣するの餘裕すら有せざる我國が、如何にして國防上の理由を有するにも非ず、又同盟國の安危に關するにも非ざる歐洲の大陸戦に参加せんが爲めに數十萬の陸兵を派遣するの餘裕あるべきや。若し斯の如き兵力の餘裕ありとせば、我國は當に増師の必要なのみならず寧ろ大々的に陸軍を縮少し得べきであらう。我陸軍當局が日露戰爭に於て失ひし六萬の兵員を補充するの必要に驅られて増師案を提出せることはこれ明らかに我兵力に缺陷あることを自認したものである。而して此事は當に我國が遠く歐洲に派兵すべき餘裕なきことを證明するのみならず、若し歐洲派兵の結果、我兵力に更に大缺陷を加ふるが如きことあらば、殆ど之を補充するの方策なかるべきことを證明するものである。一面に於て戦後の露國に備ふる兵力の缺陷を急説しつゝ、他の一面に於て更に我現在の兵力に大缺陷を生ぜしめて顧みざらんとするが如き暴舉は假令陸軍當局にして狂すと雖ども爲し得べきことでない。

歐洲出兵論を葬る (某海軍將官)

して其海軍と雖ども、英獨主力艦隊の決戦を見ざる今日、果して我國防上に幾許程度まで危険を波及すべきやは未定の問題であるから、今日に於て之が對策を云爲する程の急に迫られた問題ではないのである。

或は若し萬が一にも英國の海軍が破れて英本國が危機に瀕するが如き場合には、我國は同盟條約の範圍外のことであるけれども、或は同盟國の誼として海軍を以て之を救援するの必要に迫られるかも知れぬ。これならば一考の價値がある。併し乍ら、これとても之を實際問題として觀する時は、英海軍の主力の傾覆するが如きことは萬々有り得べからざることであるのみならず、假りに英海軍の形勢不利に陥りし際と雖ども、我國は之を救援すべき兵力を有せぬ。何となれば現在の我海軍力は自國を防衛するにすら大不足を告げつゝあるからである。或は這回の戦役に於て我艦隊の一部が、遠く南洋及南米方面に策動せしを以て英國救援艦隊の派遣必ずしも難事に非ずとなすものあらんも、南洋、南米方面に策動した我艦隊は、比較的勢力微弱なる枝隊に過ぎないので、我艦隊の主力は終始我近海を離れなかつた。これは此主力艦隊は國家防衛の根幹であつて此艦隊にして若し萬一の變あらば國防上實に由々しき大事となるからである。従つて今後と雖ども我國は自國の防衛のため、國家の運命を賭して作戦する場合に非

い。要するに如何にしても出兵可能の名義は立たぬのである。

### 四

又更に之を世界的經綸の眼光を以て觀する時は、我國は果して獨逸の止めを刺さるべからざる理由ありやを疑はざるを得ぬ。膠州灣の攻撃は東洋の平和、我國權の維持の爲めである。併し乍ら何故に獨逸の本國まで攻め潰さなければならぬのであるか。吾人は素より聯合軍側に同情を持つものである。併し乍ら獨逸軍の健闘は敵乍ら天晴れと讚嘆せざるを得ない。然るに之を飽までも仇敵視して其怨恨を深うするが如きことは當に戦後に於ける我國の世界的經綸に累を爲すのみならず、苟くも義勇を尙ぶ我國人の敢てするを欲せざる所である。

或は戰爭を早く終結せしむる爲めに出兵すべしと言ふものもあるも、日本軍の歐洲に至ることは少くも戰爭を今より一年後まで長引かしむるものである。假令我軍をして連戦連勝を博しせむるも獨軍を屈服せしむるまでには少からざる日子を要する。而かも斯の如きことは諸種關係上到底不可能である。さすれば我軍の参加したるが爲めに益々戰爭を長引かしむべき虞れがある。故に此際の上策は双方共に戦ひ疲れたる

時を機として宜しく和すべきである。或は現状を以て和せば、獨逸の威權獨り隆々として他を壓するであらうと憂慮するものもあるが、併し獨逸と雖ども既に今回の戦を戦ひし以上、餘程のことで無ければ再び干戈を執つて起つべしと思はれぬ。従つて戦後若し聯合軍側諸國にして獨逸を制する能はずとせば其罪は獨逸に非ずして寧ろ是等諸國の怠慢にある。故に此際は寧ろ平和問題に向つて一步を進める方が上策ではないかと思ふ。殊に我國としては毫も獨逸と深怨を結ばざる可からざる理由なく、此際は寧ろ戦後の世界的政策に資するの餘地を存して置くべきである。

### 前代未聞の愚論

陸軍少將 草生 政恒

近頃歐洲派兵論の世上に現はれ、其期成會までも見るに至りたるは、實に心外千萬である。如何に我國民が軍事智識に缺乏し、是非の辨別を缺くとは言へ、苟くも立法府に列し、言論界に操觚する有識者、先覺者とも稱せらるゝ人々が數人

ならず、十數人ならず、數十人までも躍起となつて此大愚論を唱道するとは眞に沙汰の限りである。元來此問題は、之を眞面目に考ふる時は殆ど問題に上すにすら値せざる程の問題であるが、世間或は之に迷はざる、向きもあらうから、茲に其如何に取るに足らざる愚論であるかを明瞭にして置かうと思ふ。

吾人が歐洲出兵に反對する理由は數段ある。先づ其第一段は我國軍建制的意義に於て之に反對である。我國軍は人も知る如く、徵兵令に由て徵集せられた人員より成立せるもので世に所謂血稅である。必任意務兵である、傭兵に非ず、又義勇兵でもない、若し是れが、或外國に於ける例の如く傭兵か義勇兵かであるならば、之を國家防衛の爲めに使用しやうと、乃至他國の援助の爲めに使用しやうと、兵役の意義に於て其間に何等の等差はないが、徵兵令の結果たる必任意務兵は、其國家防衛の爲め以外には其國の主權者と雖も、畏れ乍ら我々大元帥陛下と雖ども妄りに之を用ひさせ給ふことの出來ぬ程の嚴肅なる意義を有するものである。即ち我々日本帝國の危急存亡に瀕したる場合、國家防衛の意義を有する戦争の場合に於てのみ用ひ得べきものである。之を過去の實例に徴するも日清、日露の兩戦役は、共に我國防上の致命的地點たる朝鮮を我々權力下に維持するために戦はれた戦争であるから明らかに國家防衛の爲めの戦争である。又這回の膠州灣攻撃の如きも、所謂臥榻の傍、他の鼾睡を容れざるもので、我國防上、獨逸軍の根據地が、あの地點——東洋に存在することの危険を感じたから、此際を機として我國防上の安全を企圖したまでである。然るに我兵を遠く歐洲に派遣すると云ふことは全然之と意義を異にする。我軍が歐洲の獨軍を撃破せな

歐洲出兵論を葬る (陸軍少將 草生政恒)

ければ國防上危険であるとは、何人も之を認め得ざる所である。果して然らばこれ何の爲めの派兵であるか、吾人が獨逸に對するよりも比較的同情を有する聯合軍を援助する爲めと云ふ以外に、國防上全々無干渉の派兵である。斯かる事に兵を用ゐんとするは前述の傭兵乃至義勇兵ならばいざ知らず、苟くも必任意務兵なる以上、到底爲し得べきことではない。或は言ふであらう、我國は既に獨逸を敵として宣戦せる以上、今日尙ほ獨逸は我敵であるから之を討たなければならぬと。これは所謂三百代言の言ひ草である。我國が獨逸に對して宣戦したのは、彼が膠州灣の無償無條件還附を拒んだからである。今日既に其地を占領し且之を根據とせし艦隊を撃滅せし以上、我々戦闘の目的は、少くも軍事上に於ては之を達成し得たものである。歐洲派兵などは我國が獨逸に宣戦せし當時に於て、毫頭考へて居なかつたことである。而して獨逸に宣戦せる結果歐洲に獨逸軍あるが爲めに、我國家が危険を感じると云ふならば格別であるが其虞れの絶無——少くも陸軍の關係に於て絶無なる今日、何を苦んでわざ／＼歐洲にある獨逸軍を討ちに行かなければならぬのであるか。飽までも獨逸に止めを刺さなければならぬと云ふ論者は、千八百六十六年の戦役に、獨軍が埃都維納を指呼の間に臨むの地點にまで侵入し乍ら、之を班した夫のビスマークの機略を少しは味ふて